

〈なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか?〉を 哲学が問うことの意味について

乗 立 雄 輝

1. 哲学的な宇宙論の可能性

筆者は、19世紀後半から20世紀前半にかけてのアメリカで展開されたプラグマティズム、記号論を中心とした哲学を手がかりに、経験主義的な形而上学と宇宙論の可能性を探ることに関心があり、主な哲学者として、Charles Sanders Peirce (1839–1914), William James (1842–1910), Alfred North Whitehead (1861–1947) を考察の対象としている。前二者は1930年代に論理実証主義が北米に到来する以前の古典的プラグマティズムの担い手であり、彼らの形而上学的議論の後継者がホワイトヘッドである。

本稿では、その中でもジェイムズの思考にヒントを得て、「価値」の問題からアプローチしていく宇宙論についての議論（というよりも、正確には、議論のアイディア）を示してみたい⁽¹⁾。そのジェイムズは、心理学時代に、いわゆる「ジェイムズ＝ランゲ説」を提唱したことで知られている。それは、ジェイムズ流の巧みな表現によれば、「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という言葉で要点を示すことができる。しかし、このジェイムズ＝ランゲ説と、彼が哲学へと本格的に転向した後に展開するプラグマティズムや根源的経験論 (Radical Empiricism)、そして『多元的宇宙』 (*A Pluralistic Universe*, 1909)、『宗教的経験の諸相』 (*The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, 1902) で描く世界観との結びつきは、それほどはっきりと見えるものではない。

そこで、まずは「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」という、一見、奇妙に思える表現に注目したい。それは、身体を通じた知覚によって生じる身体的変化が最初にあり、その次に、心の中に何らかの情動が発生するということを意味している。このことは、実は、ジェイムズが私たちに喜びや悲しみといったものをもたらす、何らかの価値や意味といったものが、私たちの精神がそれを認知する以前に、世界の中に先在／潜在するということを示そうとしていると解釈可能である。つまり、事実に対して私たちが精神によって判断を加えることで、価値付けや意味づけを行うのではなく、そもそも、価値や意味といったものが最初から世界に根付いて存在しているのではないかという仮説が、このジェイムズの主張の背景にある。それは、ジェイムズが、根源的経験論、『多元的宇宙』、『宗教的経験の諸相』といった学説や論考によって明らかにしようとした世界の姿にはかならない。

このように考えるならば、「価値」と呼ばれるものは、それ自体は無価値である世界に人為的に付加されるものではなく、世界の実在性 (reality) の根幹、もしくは、その重要な一部をなしていると考えることが可能であろう。このような考え方を持つ哲学者の中に、「価値論的 (価値支配的) 宇宙観」 (the Axiarchic View of Universe) と呼ばれる議論を提示する一群の

哲学者たち、たとえばパーフィット、レッシュャー、ジョン・レスリーらがいる⁽²⁾。彼らは、「なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか？」というライブニッツが発した有名な（というよりは、一部からは「悪名高い」）問いに対して、ある種の価値は、それが現実化することへの強い力を持っており、それゆえに、この世界が存在する、と応答可能ではないかと考える。つまり、この世界は、何らかの価値が現実化することによって存在しているのであって、その価値が世界の実在性の根幹をなしていることは、この世界の存在理由そのものであるから、当然のことなのである。

これらの議論が、極めて荒唐無稽な話に聞こえることは間違いない。たとえば、「事実」（…である）から「価値・規範・当為」（…であるべき）を導出することは、いわゆる自然主義的誤謬（naturalistic fallacy）の一種として批判されるが、この考え方は、その誤謬に誤謬をさらに重ねて、「価値・規範・当為」から「事実」（存在）を導出しようとしているのであるから、かなり深刻な誤謬だと言えるかもしれない。しかし、もし、「なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか？」という問いに真摯に答えようとするならば、これは有力なアプローチの一つではないかと筆者は考える。さらに、それは、「無から存在へと至る論理的かけしは存在しないように思われる」と『哲学の諸問題』（*Some Problems of Philosophy: A Beginning of an Introduction to Philosophy*, 1911）の中で語ったジェイムズへ、「論理的かけし」を提供する試みでもあり同時に、本稿では詳しく述べるのがかなわなかったが、価値や意味の問題を考察することを主題の一つとして持つ人文学が、宇宙論を語ることの可能性を示すものでもある⁽³⁾。以下、議論の方向性を示してみたい。

2. パルメニデスの教説

筆者は、大学に入る前から、「なぜ、この宇宙は存在しているのか？」といった疑問を漠然と抱いてはいたが、この問いをはっきりと意識したのは、大学三年生のときにパルメニデスの教説について聴いたときである。パルメニデスとは、ソクラテスが現れる以前の紀元前六世紀から五世紀にかけて、古代ギリシアにおいて活動した哲学者であるが、彼は詩のようなスタイルで問題を論じ（というよりも、哲学的な問いかけをモチーフとした詩を詠み）、その断片が現代に伝わっている。その中で、いわゆる「生成」と「消滅」、そして「変化」を否定したことで知られるが、筆者が今でも強い関心を惹かれるのは「生成の否定」である。それは以下のような議論である。

生成とは、「ない」（無）から「ある」（有）の状態へと移行することであるが、「ない」ということは文字通り「なにもない」のだから、そこから「ある」へと移行すべき十分な理由、つまり、後にライブニッツが提示する「充足理由」（sufficient reason）もまた「ない」ことになる。もし「ない」から「ある」が、[この表現には、〈時間〉の存在についての問題があるが]特定の時点で生まれるとするならば、そこにはきちんとした理由がなければならないはずだが、その理由が「ない」としたら、「ない」はずと「ない」ままのはずであり、それゆえ、「あ

る」へと移行することができない。したがって、「ない」から「ある」への移行、すなわち「生成」はありえないことになる。そして、もし、そうだとするならば、「ない」はずっと「ない」のままで、逆に、「ある」はずっと「ある」のままであったということになるはずであり、また、そうあるべきである。「ない」は「ない」し、「ある」は「ある」。つまり、無から有が生まれることはない。

筆者が、このパルメニデスの教説を聴いたとき、議論の飛躍や間違い（たとえば、個々の事物の生成の否定から、一足飛びに「世界」の生成の否定へと向かうこと、〈時間〉の問題を適切に考慮していないこと、など）は承知の上で、以下の二つの結論に至り、その両者に強い違和感を覚えた。

(A) この世界は実際に「ある」、したがって、「ない」から生まれたのではない。すなわち、この世界はずっと（この言葉を不用意に使うべきではないが、「無限」の過去から）存在し続けてきた。

もしくは、パルメニデスの教説が間違っているとしたならば、

(B) この世界が存在し始めたことに、すなわち、無から有が生成することに、特段の理由はない。

パルメニデスの教説から、この二つの主張のみが帰結すると考えるのは速断ではあるけれども、とにかくにも、この二つは受け入れがたい主張ではないかと当時の筆者は考えた。

まず、(A) についてであるが、「ものごとには、始まりがなければならない」という漠然とした信念を持っている人たちは少なくないのではないか。というよりも、始まりがない、すなわち、ものがずっと（文字通り「ずっと」）存在し続けていたということに、底知れぬ不気味さを感じるのは筆者だけではないと考えられる⁽⁴⁾。

そこで、漠然とした薄気味悪さという薄弱な「理由」（とすら、言えないかもしれないが）から、(A) を棄却して、(B) に向かうわけだが、これもまた、受け入れがたい。この場合も、ある意味では (A) を棄却する理由以上に薄弱な理由しかないが、それは、「ものごとが起きる、または、何かが存在するには、それなりの理由がなければならない」という漠然とした信念が (B) を拒絶するのである。しかし、これは、現在では非常に分の悪い考え方でもある。たとえば、このような信念は、確率的事象には該当せず、ある特定の出来事や事物が生じる、もしくは、存在する「原因」(cause, causa) を求め、それをある程度まで特定することは可能であるが、それら出来事・存在の原因と結果の連鎖全体が成立している「理由」(reason, ratio) がなければならないということには、「そういう理由があってほしい」という単なる希望や期待以上の根拠はないと思われるからである。

このように、「ものごとが起きる、または、何かが存在するには、それなりの理由がなければならぬ」という信念が、単なる希望や期待以上の根拠を持たないということになれば、あのライプニッツの問い、「なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか？」（Why is there something rather than nothing?）という、理由を問う「なぜ？」（Why?）という疑問は、そもそも成立しなくなる。（一方で、特定の出来事の直接的、間接的原因を問う、「どのようにして？」[How?] の問いは可能である。）

実際、この問いに対する「拒絶派」(Rejectionist) と呼ばれる人たち⁽⁵⁾の中にも、この「なにものも十分な理由なくしては生じない」という充足理由律（十分な理由の原理 the Principle of Sufficient Reason）を否定する哲学者たちが少なくない。他にも、理由が存在する理由が存在する理由……といった具合に無限後退に陥るといった論理的不可能性から、この問いを拒否する立場（Carl G. Hempel など）が拒絶派の典型であるが、もっとも辛辣なのはデイヴィッド・ルイスである。

「なぜ、何もないのではなくて、何かがあるのか？」

「もし何もないのだったら、その問題を問う君もここにいないことになるじゃないか。」

愚かな問いには、愚かな答えが返ってくる。（Ask a silly question, get a silly answer.）

〔中略〕この答えを愚かにしているものとは、それが、その問いを発した人が既に知っているに違いないこと以上のものを教えてくれないからだ。

（David Lewis, ‘Anselm and Actuality,’ *Philosophical Papers*, Vol. 1. 1983, p. 23.）

そして、それに続けて、次のように述べる。

〔「なぜ、何もないのではなくて、何かがあるのか？」という問いによって説明されるべき〕被説明項（explanandum）である世界の性格があまりにも包括的（global）であるため、そこには、世界それ自身と区別された原因が入り込む余地がなく、したがって、世界はいかなる因果的な履歴（causal history）ももちょうがない。

（Lewis, *ibid.* p. 24. [] 内は筆者の補足。）

はたして、この問いは、ルイスが言うように、「愚かな問い」（a silly question）なのだろうか。先のバルメニデスの議論（への筆者の応答）に置き換えて考えてみると、(A)「この世界に始まりはなく、ずっと存在し続けてきた」を否定し、さらに、(B)「この世界は、特段の理由もなく生まれた」もまた否定する可能性は残されているのだろうか。そこで、その可能性を探るために、ライプニッツの問いを振り返ってみたい。

3. 〈なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか？〉という問いとそれへの応答

ライブニッツは生涯にわたって、この問いを掲げてきたが、もっとも分かりやすい形でまとめられているのが、『理性に基づく自然と恩寵の原理』（Gottfried Wilhelm Leibniz, *Principes de la nature et de la grâce fondés en raison*, 1714）の中での議論である。この本の構成と、問題となる箇所（§ 7、§ 8）は、以下の通りである⁽⁶⁾。

〔構成〕

- § 1 実体の定義。モノドは「一」であること。
- § 2 実体の持つ性質と作用（表象と欲求）。
- § 3 モノドと物塊。心身結合の場面。
- § 4 生きた実体のヒエラルキー。
- § 5 理性と記憶。
- § 6 発生と死。予先形成説について。
- § 7 自然学から形而上学へ。理由律の呈示。
- § 8 神の宇宙論的証明。
- § 9 神と派生的実体との関わり。
- § 10 神の完全性の帰結としての最善観。
- § 11 運動法則の理由の探究に基づく、神の自然学的証明。
- § 12 最善観における全体と個。
- § 13 事物の秩序と対応の実際。微小表象について。
- § 14 精神 (esprit) について。それは宇宙の鏡であるだけでなく、神の似姿でもあること。
- § 15 自然界と恩寵界。
- § 16 真の純粋な愛。
- § 17 神を認識することと神を愛すること。
- § 18 神への愛と幸福。幸福は新たな完全性への不断の前進にあること。

〔訳〕

- § 7 自然学から形而上学へ。(充足) 理由律の呈示
- ①ここまでわれわれは単なる自然学者としてしか語ってこなかった。
- ②今や形而上学へと上昇しなければならない。
- ③その際、われわれは、一般にはほとんど使われていない大原理を用いる。
- ④なにものも十分な理由なくしては生じない、言い換えれば、なにものも、事物を十分に認識する者に対して、それがそのようであって他のようではないのは何故かを決定するのに十分な理由を提示できるのでなければ、生じない、という原理を用いるのである。
- ⑤この原理が立てられた上で、第一に問うべき問いは、なぜ、何もないのではなくて、何か

あるのか、というものであろう。

⑥というのも、なにもないこと（無）は、何かがあることよりも単純で容易だからである。

⑦それから、諸事物が現実存在しなければならないと仮定した上で、なぜ、諸事物はこのように現実存在するのであって、他のようではないのかを説明しうるのでなければならない。

§ 8 神の宇宙論的証明

⑧ところで、宇宙が現実存在することのこの十分な理由は、偶然的事物の系列の内には、すなわち、物体と、魂における物体の表象の内には見いだされないのであろう。

⑨なぜなら、物質はそれ自体では運動と静止とに、そしてこれこれの運動とか別の運動とかに對して無差別なのだから、そこに運動の理由を見いだすことはできないであらうし、ましてや、これこれの運動の理由というものを見いだすことなどできないであらう。

⑩そして物質の内にある現在の運動は先行する運動に由来し、後者はまたそれに先行する運動に由来するのであるが、望むだけそうやっていけるのだとすれば、まったく進んだことにならない。

⑪というのも、常に同じ問題が残っているからである。

⑫したがって、もはや他の理由を必要としない十分な理由は偶然的事事物のこの系列の外になければならず、その系列の原因であり、自分の現実存在の理由を自ら持っているような必然的存在者である実体の内に見いだされなければならない。

⑬そうでなければ、そこで終わりにしうような十分な理由をまだ手に入れることにはならないであらう。

⑭そして諸事物のこの究極の理由は神と呼ばれる。

これまでにも、このライブニッツの問いと彼自身による応答、ならびに、それに由来する発想や議論については、さまざまな批判がなされてきた。たとえば、先の充足理由律に対する批判は、④への疑念である。以下、代表的なものをいくつか列挙してみよう。

・⑥「何もないこと（無）＝単純＝容易」への批判

(a) バルクソン『創造的進化』(*L'évolution créatrice*, 1907) : 「無」という観念は容易に手に入れることはできず、複雑な手順が必要である。この世界に在るものをひとつずつ消去していった先に、「なにもない」状態についての観念が得られると考えられているが、何かを消去しても、必ず、それが消去された後に残る空隙を別のものが埋める。しかし、この問いでは、「無」の観念が明晰かつ容易に把握できることを前提としている点 (...rather than nothing という表現) で問題がある。

(b) ピーター・ヴァン・インワーゲン「そもそもなぜ何かがあるのか」('Why Is There Anything At All?', 1996) ⁽⁷⁾ : 必ずしも、「単純＝容易」ではない。彼の挙げる例では、確かに、中国のマスゲームで毛沢東の顔を描くのは、複雑かつ難しい。しかし、たとえば、表が赤、裏

が白のボードをたくさんの人に持たせ、好きな方を上げてよいと言ったとき、全員が赤もしくは白を上げたとしたら、それは、見かけ上は単純であるが、かなり複雑な根回しが必要なはずである。したがって、単純だからと言って、容易とは言えない。

・ § 6 までの自然学的説明への批判

ニコラス・レッシャーは、明示的ではないが、§ 6 の「予先形成説」に代表される思考、すなわち、「生命は、生命から生まれる」、「物質に関わる出来事の原因は、物質である」といった議論を、西洋文化の奥底にまで染みこんでいる「生成における（もしくは「遺伝的」）同質性の原理」（the Principle of Genetic Homogeneity）と呼んで批判する。この原理（の代表としての予先形成説）は、§ 7、§ 8 の議論を行う上で重要な鍵を握るのだが、そのことが図らずも、この問いを解答困難なものにしてしまっている。つまり、無から有が生まれることが困難となり、最終的に「神」を持ち出さざるを得なくなってしまう、とレッシャーは批判していると解釈してよい。（ただし、これはライプニッツ自身が目指したところではあるが。）

・ § 8 における「神の存在についての宇宙論的証明（Cosmological Argument）」への批判

これについては、1948年にBBC放送でイギリスの哲学者・論理学者であるラッセル（Bertrand Russell, 1872–1970）が、カトリックの神父であり、中世哲学の研究者として著名なコプルストン（Frederick Charles Copleston, 1907–1994）と、この世界が存在するための最初の原因を議論した際に、コプルストンを批判したものが有名である。

コプルストンは、この世界の最初の原因としての「神」の存在を主張しようとする。そのコプルストンの主張は、すべてのものごとに原因があるとしたら、そこから遡って、それらすべてのものごとの原因があるはずであり、それがすなわち、神である、という形を取っている。

しかし、ラッセルはそれを批判して、「存在するすべての人に母がいる」（Every man who exists has a mother.）から、「人類には、[たった一人の] 母がいなければならない」（The human race must have a mother.）を導出してしまった過ちを指摘する。

ラッセルが述べている英語ではかなり見かけの異なる文章になるが、日本語では、わずかに助詞が一つ代わるだけで、ほぼ英語と同じ意味となる。すなわち、

（１）「すべての人に母がいる」

と

（２）「すべての人の母がいる」

であるが、ラッセルは、コプルストンが（１）から（２）を誤って導出していると批判する。かりに、「すべての人の母」というものが実際に存在していたとしても、それは、「すべての人に母がいる」という事実からは、決して導けないはずの主張なのである。

4. 問いの再構成——パーフィットの提案

このように考えていくと、この問いは原理的に応えることが困難で、ルイスの言うように「愚かな問い」のようにも思えてくる。しかし、この問いを大胆に組み替えることで、いわば、この問いを「ライブニッツの呪縛」から解放し、問題に取り組もうとしているのが、デレク・パーフィット (Derek Parfit, 1942–2017) である⁽⁸⁾。

パーフィットは、ライブニッツが、⑤で、第一に問うべき問いは「なぜ、何もないのではなくて、何かがあるのか」であり、それから、⑦その第一の問いに答えることで諸事物が現実存在しなければならない理由が明らかになった上で、第二の問いとして「なぜ、諸事物はこのように現実存在するのであって、他のようではないのか」という順序で問いを発していることを問題視する。つまり、もし、この問いに答えようとするならば、ライブニッツの出した順番を逆にして、先に第二の問いに答えるべきであって、その上で、第一の問いに答えることができるとパーフィットは考える。言い換えるならば、この世界が、他のようではなく、このように存在していることの理由を示すことが、実は、この世界が存在している理由を説明することになる、そう考えるのである⁽⁹⁾。

このような考え方から、本発表の冒頭で述べた「価値論的〔価値支配的〕宇宙観」(Axiarchic View of Universe) へと導いていくことが可能ではないだろうか。すなわち、宇宙が、現にある（もしくは未来において）、このような姿として現れている（もしくは、現れる）ということが、この宇宙が存在する理由であるとしたとき、この宇宙に存在する価値こそが、この宇宙を現実化する原動力となっていると考えるのである⁽¹⁰⁾。

これらの説明は、いわゆる「目的論的」(teleological) 説明という形態を取る。そして、目的論的である以上、その「目的」、すなわち、現実化されるべき「価値」がどこから生まれたかを説明する必要があるが、そこにレスリーのように、何らかの究極の存在を置くというのは、行き過ぎのように思われる。先に挙げたルイスは、因果的説明が、説明項 (explanant) として働く「存在者の外挿」(existential inputs⁽¹¹⁾) を要求するということを踏まえて、「被説明項 (explanandum) である世界の性格があまりにも包括的であるため、そこには、世界それ自身と区別された原因が入り込む余地」がないと述べたが、説明項を外挿するのではなく、あくまでも世界に内在するものとして理解することができないかを試みたいと考えている。これにはかなりの困難が予想されるが、もし、それが可能であるならば、本発表の冒頭で述べたような、価値や意味といったものが最初から世界に根付いているというジェイムズの世界観とうまく調和できるのではないか。

そのジェイムズは『プラグマティズム』(Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking, 1907) において、世界は未完成の状態にある、つまり、世界は可塑的なものとして存在していると主張する。その可塑的な世界に住むわたしたちの行為によって、新たな現実が生みだされ、世界が完成へと近づいていくと主張するのだが、彼は、合理論とプラグマティズムを対比する形で、「合理論にとっての実在とは永遠の昔から出来上がっており、完成された

ものであるのに対して、プラグマティズムにとっての实在とは現在でもなお形成中のものであって、その様相を構成する諸部分を未来に期待している」(… for rationalism reality is ready-made and complete from all eternity, while for pragmatism it is still in the making, and awaits parts of its complexion from the future.)⁽¹²⁾とも述べる。価値の現実化の過程にある、この宇宙において、わたしたちの行為がその現実化に参加する、そのような宇宙の姿を描くことが可能ではないだろうか。そのとき、「それぞれの哲学は宇宙にとって親密な諸部分であり、宇宙が、その宇宙自身について考える何ものかを表現している」(Philosophies are intimate parts of the universe, they express something of its own thought of itself.⁽¹³⁾) というジェイムズの言葉を、荒唐無稽ではない意味で理解できることを期待したい⁽¹⁴⁾。

註

- (1) ジェイムズについては、伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』(2009年)、冲永宣司『始原と根拠の形而上学』(2019年)、そして、大厩諒「ジェイムズ哲学の統一的理解への試論——経験への多角的アプローチという方法論に注目して——」(博士論文、中央大学、2017年)から、さまざまな示唆を受けた。
- (2) パーフィットを価値論的宇宙観の陣営に入れるのは無理があるかもしれない。しかし、後述するように、この現実の宇宙が、このような特徴を持っているがゆえに存在する、という考え方をしていることで組み入れた。ご批判を乞いたい。
- (3) このように述べると、自然科学と人文学との間に垣根を設けようとしているように思えるかもしれないが、むしろ、それには、はっきりと反対したい。ここで述べようとしているのは、「この宇宙、世界がなぜ存在しているのか?」という問いに対しては、さまざまな応答可能性があるはずであって、哲学を含む人文学がそれを行うことも可能であるし、それが自然科学における探究と対立するのではなく、むしろ協調すべきではないか、ということである。
- (4) このように、始まりがないことの薄気味悪さを表現した小説に、ボルヘス『砂の本』、ロバート・A・ハインライン『輪廻の蛇』などがある。ちなみに、筆者にとって意外だったのは、講義などで本稿が扱っている問題を議論した上で、リアクション・ペーパーに感想や意見などを求めると、半数以上の受講者たちは、筆者と同様の意見、というよりは、感覚を表していたが、これまた少なからぬ人たちが逆の意見、たとえば「無から有が生まれる方が気持ち悪い」、「ものごとがずっと存在し続けてきたと考える方が、安心感がある」というコメントを寄せていたことである。これらの意見、特に後者の意見は、「存在」についての筆者の臆断を気づかせてくれるものであった。
- (5) ライブニッツ研究者としても知られるニコラス・レッシュャーは、この問いをめぐるさまざまな哲学者たちの対応を手際よく整理している。本稿でも大いにそれを参考にした。Nicholas Rescher, *On Explaining Existence*, 2013. また、ジム・ホルト『世界はなぜ「ある」のか? 実存をめぐる科学・哲学的探索』(寺町朋子訳、早川書房、2013年。文庫版[2016年] 副題:「究極のなぜ?」を追う哲学の旅)も、この問いに対するさまざまな反応を網羅的に紹介している。後述するパーフィットやレスリーの議論ならびに彼らへのインタビューもそこに含まれる。
- (6) 以下の「構成」と訳は『ライブニッツ著作集9 後期哲学』(工作舎、1989年)所収の米山優訳(250-1頁)と同解説(260-1頁)をそのまま用いた。但し、訳文に若干の変更を加えた。また、囲み強調と訳文の番号は、便宜上、筆者が付したものである。
- (7) 柏端達也他、編訳『現代形而上学論文集』、勁草書房、2006年所収。76頁以降。
- (8) 'Why Is Reality as It Is?,' *The Times Literary Supplement*, July 3, 1992.
- (9) パーフィットは、可能性の概念の分析、そして多宇宙論(multiverse theory)をベースに議論

を展開しているが、ここでは、彼の基本的なアイディアを示すのみで、詳細な議論は割愛せざるを得ない。

- (10) 本稿の冒頭でも述べたように、このパーフィットと同じような見解を示す哲学者として、先述のレッシャーやジョン・レスリー (John Leslie) がいる。ただし、彼らの考える「価値」はそれぞれ多様であり、レスリーのように有神論的に見える議論をするものもあれば、それに否定的な立場もある。以下を参照のこと。

Nicholas Rescher, *Understanding Reality: Metaphysics in Epistemological Perspective*, Lexington Books, 2018.

彼らに対する批判的な考察としては、W. J. Mandel, *Idealist Ethics*, Oxford University Press, 2016.

- (11) この表現は、レッシャーの前掲書 31 頁から借りた。
- (12) *The Works of William James, Pragmatism*, Harvard University Press, 1975, p. 123.
- (13) *The Works of William James, A Pluralistic Universe*, Harvard University Press, 1977, p. 143.
- (14) 本稿では、パースを取り上げなかったが、彼は多宇宙論をベースにした進化論的宇宙観 (evolutionary cosmology) を提示する。これはジェイムズと同じく、可塑的な宇宙を基本的なアイディアとして持っているが、そこで現実化していくのは、「具体的合理性」(concrete reasonableness) である。